

「広島」が消えた「ピカドン」

木村 美子さん（昭和 16 年生まれ）

日本が真珠湾攻撃をする 2 ヶ月前の 1941 年（昭和 16 年）10 月 5 日、私は広島市の比治山ひじやまのふもとの段原だんばらで生まれました。3 才の時、小学校教師であった父は学童疎開の引率のため不在でした。男手がないことを心配した親戚の助言で、母の実家の呉に、母と 1 歳の妹と帰っていました。呉は日本一の軍港であったため、激しい空襲を受けていました。戦闘機からは爆弾だけでなくコールタールや油もまかれて徹底的に攻撃されたそうです。避難先の母の実家も空襲で全焼し、その様子を、火の粉が入ってきて熱に耐えながら防空壕で見っていました。住む処をなくした私達家族は、広島市荒神町にある親戚のお寺の浄光寺に移りました。祖父の妹が嫁いでいました。

その約 1 ヶ月後のことでした。1945 年（昭和 20 年）8 月 6 日の朝 8 時 15 分、広島に原子爆弾が落とされ、爆心地から 2km の浄光寺で私は被爆しました。私は 3 歳 10 か月でした。

ピカーッ！ 突然、目の前が真っ白になり、ドォーンという大きな音とともにもの凄い振動と熱風が私達を襲いました。母、祖父、妹、叔母、お手伝いさんと一緒にお寺の台所（庫裡）で朝食をとっていた時でした。建物は一気にくずれ落ち、一瞬にして私達はその下敷きになってしまいました。本堂で朝のお勤めの最中だった住職と祖父の妹も本堂の下敷きになりました。浄光寺は全焼。私は幼いながらも、その時の音や衝撃は今でもはっきりと憶えています。この爆弾を広島の人「ピカドン」と言っていました。私より 10 歳年上で、母の義弟である大悟叔父は陸軍幼年学校で被爆しました。

爆心地から半径 2 km 以内では、ありとあらゆる物が燃え、見渡す限り焼け野原になりました。残っていたのは浄光寺の黒焦げの山門のみでした。どの様にして助かったのか、私達家族は街一面を焼き尽くす業火に追われながら、広島駅北側の二葉の里にある「広島東照宮」に避難しました。高熱で溶けて燃えている道路（アスファルト）を裸足で必死に逃げました。途中、衣服は燃え、髪もチリチリになり、皮膚は火傷でめくれていました。私の身体もあちこちにガラスの破片が刺さり、顔と上半身に大火傷を負いました。どのくらい時間が経ったのでしょうか。気がついた時には、目・鼻・口だけ出して、上半身を包帯のような布で巻かれていて、祖父の膝に抱かれていました。母と妹は頭に大ケガをしましたが、薬や水というものはなく、真夏の炎天下、火傷には「ひまし油」が塗られただけで、すぐ蛆虫うじむしがわいてきました。

東照宮の境内には、息絶えた人が横たわり、ひどい火傷を負った人は、口々に「水」「水をくれ」とうめき声をあげていました。大勢の負傷者が助けを求めて集まって来ていて、足の踏み場もない状態でした。負傷者の横では、男女の区別さえもつかないほどに焼けただれた死体が、ほとんど裸同然の姿で積み上げられていました。無惨な姿になった遺体を高く積み上げ、ガソリンをかけ、昼夜を問わず、何日も焼いて街全体が火葬場、臭いも酷くてたまりませんでした。地獄の市内を彷徨い、大悟叔父は東照宮でやっと私達を見つけたそうです。今でも、ずっと忘れられず、頭に残っている光景です。広島にも住めなくなり、祖父は呉でまた暮らすつもりだったようです。

しかし、更に追い打ちをかけるように、1 ヶ月あまり経った 9 月 17 日の夜、見渡す限り焼け野原になった広島を、超大型の「枕崎台風」が襲ってきました。この台風により、ガレキと共に 12 万

人の遺体が泥沼と化して広島湾に流されました。船も出入りできなくなりました。太田川を源流にした「7本の川」と広島街が消えました。幸か不幸か、この台風を広島人は「神風台風」とも言ったそうです。

祖父が探した呉の家も全て流されました。あの時、呉に帰っていたらと思うと…命拾いをしました。

一方で、原爆投下後、70年は草木も生えないと言われていましたが、この台風が原爆による放射性物質を流し、翌年には草木が生えました。しかし、葉の色は今見る緑色ではなく、異常な色でした。カボチャもスイカも異常な大きさだったそうです。

私達が生まれ育ったのどかで平和な「広島」の街は、人々とともに消えてしまいました。原子爆弾で頭を大ケガした母は、戦後呉の海軍病院で三度手術、妹も頭を手術し、強い頭痛薬が離せませんでした。

学童疎開の引率のため、8月6日当日市内に居なかった父は、その後、地獄と化した市街を1週間必死に私達を探し回り、父の実家に帰っていましたが、その後、間もなく、原爆により亡くなった兄の嫁と結婚することになりました。父の弟2人は戦死し、大農家の実家は次男の父を跡取りとしました。そのようなことは、当時は珍しくはありませんでした。それからは、一緒に暮らせなくなり、その後ずっと会えませんでした。その後、父は二次被爆を発症し亡くなるまで苦しんだということです。父の葬式の時、兄嫁が泣いて詫びていた姿が今でも焼き付いています。私が32歳の時でした。家族がバラバラになりました。生きていくため仕方なく……。

被爆後、広島市内から40km離れた賀茂郡西条町（今の東広島市西条町）で母と妹と3人で暮らしました。小学校1年生になった私と母、3歳下の妹との生活は、これ以上ない貧困の生活を余儀なくされました。母は原爆症で働けない状態だったので、私も貧血状態でしたが、私が生計を立てることになりました。近所の子守や行所（内職）など、やれることは全てやって生計を立てました。何より食べ物に一番困りました。お米などは勿論。玉子、牛乳、肉等買えるはずはなく、栄養不足や不衛生により、疫病や肺病が流行しました。街の3分の1が隔離され、小学校の床にそのまま寝かされました。ノミやシラミが湧き、頭にDDTをかけられたり。小学校低学年の時はみんなお腹に虫が湧き、虫下しを飲まされました。また、クラスには片親も多く、被爆した人としていない人で分けて身体検査が行われました。また、広島原爆の映画をたびたび見せられたり……。思い出したくないことはいっぱいあります。あまりにも悲惨な現状でした。

小学4年生から、そろばん塾の先生のご好意で家事手伝いをさせてもらいながら、そろばんを習うことになり、17歳まで必死に学びました。そろばんが「一生の宝」となり、貧困から立ち上がるため、やっていて良かったと今も思います。

その頃、叔父に似島に連れて行ってもらいました。広島湾から船で20分の場所で、風穴の中には、亡くなった方がそのまま放置されていて、骸骨の山を見ました。残酷でした。後に、広島市の平和公園に納骨されています（7万人）。

母と妹の生活を支えるため、中学しか行けなかった、そのことが、一番辛かったことです。中学を卒業して、18歳の時、東京へ働きに出ました。そろばんのおかげでお給料が3カ月で2倍になり、母と妹を呼び寄せました。20歳で結婚し、3人の娘にも恵まれましたが、夫が40歳で亡くな

りました。朝日新聞店の仕事をしながら50歳まで娘3人を夢中で育てました。

私が50歳で仕事のため鹿嶋に移住。被爆の影響は、何年も経っても出ます。67歳の時、私は結腸癌末期で大手術。今も眼に当時の原爆の風圧が原因と思われる症状が出ています。母は頭を何度も手術をしましたが、73歳で亡くなりました。10歳年上の叔父は、建物の中で被爆したため大きな傷は無かったそうですが、私たちを探すため、市内の地獄を見て東照宮まで歩いてきたため父と同様二次被爆で、亡くなるまでに何度も病院を出入りし、白血病や、「ぶらぶら病（筋肉がダメージを受けてだるくなる病気）」を発症。叔父は83歳で亡くなるまで原爆の影響と考えられる症状に苦しみました。叔父の子どもや孫、広島にいた親戚にも、重い原爆症の症状が出ています。私も子どもや孫に影響が出るのが内心、今でも、心配でたまりません。叔父は亡くなる前、「被爆したことは喋りたくはないけど忘れては困る」と言い、原爆のことを調べていた私に、被害や影響をノートに残していたものをくれました。

1991年、50歳の時、勤めていた会社の社員旅行で、たまたま北マリアナ諸島のテナン島に行くことになりました。そこは、広島と長崎に原爆を落としたB29爆撃機が飛び立った場所でした。「なぜ、自分がこの場所にきたのだろうか？」と、私は驚きと同時に運命のようなものを感じました。ジャングルの中で戦闘機の滑走路を見たとき、わかってはいましたが、自分は被爆者なのだと思えて考え、ゾッとさせられました。日々必死に生きて子育てをしてきましたが、子どもたちが生きがいとなり逆に生かされているのだ、と気付きました。また、人にも恵まれました。

2011年3月11日、東日本大震災による、福島第一原子力発電所の事故災害は、私にとって大きな衝撃でした。「原発は原爆と兄弟」です。原発の被ばくの危うさ恐ろしさを感じました。

戦後、ABCC（原爆傷害調査委員会）という団体の、立派な建物ができましたが、そこは被爆者をモルモットにした施設でした。

世の中がどう変わろうと、全ての被爆者が死に絶えても、世界唯一、「広島」「長崎」の上空で炸裂した原爆の事実は変えることはできません。

広島では他にも放射能を含んだ黒い雨を受けた人や、熱くて川に飛び込んだことから亡くなった方も多くいます。1発の原爆の影響は計り知れないものです。

戦争は人間のすることではないです。一番は核兵器です。人は思い思われるべきだと、生きてきて思いました。私のような被爆者を二度とつくりたくないように、「平和の尊さ」「健康の有難さ」「助け合う事の大切さ」を、今後も訴え活動を続けて参ります。

書きたいことはたくさんありますが、核兵器を扱うことは世界を滅します。人類には扱えません。そのことを訴えたいです。

(原文のまま掲載しています)



中学生に被爆した経験を語る木村さん